

近代における在日タタール人イスラーム教徒共同体の対日活動

三沢伸生（東洋大学社会学部教授／アジア文化研究所・所長）

1. はじめに

周知のごとく近代において満洲・朝鮮半島は、日本とロシア（後にソ連）の権益争奪の場であった。1894-5年の日清戦争に日本が勝利して朝鮮半島における優位性を得た。しかしロシアはドイツ・フランスと結んで三国干渉により日本の進出を抑制し、その見返りとして清から東清鉄道の敷設権利を得て、シベリア鉄道との連結を進めた。ここに至って満洲が日本とロシアとの争奪地域となった。

こうした状況下に、ロシア領内のイスラーム教徒であるトルコ系タタール人がやがて大挙して「外地」と呼ばれた日本支配領域および「内地」と呼ばれた日本本土に移住することとなった。この結果として「在日タタール人」が近代日本に深くかかわることとなったのである。

20世紀末に至り学術研究において関心を高めている在日タタール人であるが、戦後から半世紀以上経過して関係者の物故、関係史資料の喪失・埋没の状況のなか、研究の進展は必ずしも順調でない。それでもこの間に史資料の発掘・発見があり、国際的な研究のネットワークも稼働しており、近代日本における在日タタール人の活動を解明していくことが急がれている。

本稿は、在日タタール人が日本とのあいだにどのような関係を構築し、日本に対してどのような態度・行動をとってきたのかの推移を整理し、その根拠となる史資料の問題とあわせて今後の研究課題を示すことを試みるものである。

2. 先行研究

20世紀末に至るまで、在日タタール人の存在は忘却されていた。

タタール人に関する研究の歴史は古いが、こと「在日タタール人」として限定するならば、鴨沢（1982-83）の調査・研究が嚆矢である。鴨沢が複数の在日タタール人から聞き取った調査記録は、現在では実行不可能な得難い極めて貴重なものと評価されている。しかし発表当時は学界に大きな反響を呼ぶことなく、また鴨沢自身が様々な研究を同時並行に進める中において、これに続く研究はなされず、在日タタール人の研究は途絶えることとなった。

その停滞を破ったのは、小松夫妻による（Abdürreşid İbrahim 1328-1331）所収の日本訪問部分翻訳であるイブラヒム（1991）と杉田（1995）とである。両著によって、近代日本とイスラーム世界との関係、とりわけ日本の「回教政策」に深く関係する在日タタール人の重要性が学界において再認識され、史資料の探索・分析と研究が大いに進展することとなった。

とりわけ、詳しくは後述する在日タタール人の対日活動の第1期・第2期にか

かわる 4 人の主要人物、すなわち、ムハンマド・ガブドゥルハイ・クルバンガリー (Muhammed-Gabdukhay Kurbangaliev, 1889-1972)、最も注目の集まるアブデュルレシト・イブラヒム (Abdurreshid Ibrahim,)、そしてムハンマド・アヤズ・イスハキー (Muhammed Ayaz Ishaki, 1878-1954)、加えて日本側で彼らと接点を有した大久保幸次 (1887-1947) について、進展がみられる。¹

クルバンガリーについては日本内地の在日期間の活動につき、多くの文書史料が残されているために 4 人の中では比較的知られていたが、(西山 2006) は日本側の史資料に加えて、ロシア・ソ連の史資料の併用で国際的にも高く評価されるべき労作であり、続く (松長 2012) も優れる。4 人の中でもイブラヒム研究の進展が著しい。日本では上記の著書の翻訳を行った小松久男が (小松 2008) が最も重要であるが、そのほか (坂本 2012)・(三沢 2018) など多くの研究が進んでいる。トルコでは、イブラヒムの著書の現代トルコ語校訂訳に始まり、(Akbay 2012)・(Dündar 2018c, 2020) など国際シンポジウム開催に基づく要旨集の出版、さらに (Türkoğlu 1995a, 1995b) も発掘した史資料に依拠した優れた研究である。イスハキーについて (松長 1999) はその重要性を日本の学界に喚起させたが、海外では 1990 年代前半のソ連の崩壊とトルコ系中央アジア諸国の独立に伴う近代における民族主義運動の検証が活性化する中でイスハキーの再評価がなされ、(Çağtay 1979)・(Tansel 1982) 以降、史資料探索・研究の空白期を一気に埋めてトルコでは (Kanlıdere 2019) や (Türkoğlu 2023)、²ロシア・東欧・中央アジア諸国では (Kuromiya & Peplonski 2012) はじめ研究に大きな進展がみられる。また Mansur Khasanovich の尽力により、1998 年から 2014 年にかけて、全 15 巻の浩瀚なるタタール語による著作集が刊行された。³

戦前・戦中期に回教圏研究所の所長を務め、トルコにかかわる日本の学術研究の創始者である大久保幸次は、その経歴が仇となり、戦後に GHQ 主導下に日本の回教政策の解体において、不遇の身の上に陥って 1947 年にひっそりとその生涯を終

¹ 在日タタール人の氏名は出自や関係する民族・国家により複数表記されうる。クルバンガリーについては、出身のバシキール語表記であれば Мөхәмәтҗәбделхәй Ғәбиҙулла улы Корбанғәлиев、広義のトルコ系として現代トルコ語表記で Mehmet Abdülhay Kurbanali, ロシア語で Мухаммед Габдулхай Курбангалиев と表記する。本稿では近代日本の文書や諸史資料にみられる「クルバンガリー」と音写表記する。同様にアヤズ・イスハキーはタタール語で Гаяз Исхакый ないし Gayaz İsxayı, Gaiāz Iskhakyı 現代トルコ語で Ayaz İshaki と表記する。クルバンガリーと同じく、本稿では近代日本の文書や諸史資料にみられる「イスハキー」と音写表記する。アブデュルレシト・イブラヒムは、タタール語で、Габдрәшит Ибраһимов、ロシア語で Абду-Рашид Гумерович Ибрагимов、現代トルコ語で Abdürreşid İbrahim (ただし現代トルコ語の清音化現象で語末の d が t となる場合もある) と音写表記する。本稿では近代日本の文書や諸史資料にみられる「イブラヒム」と音写表記する。付言すれば史資料の探索時にこれら複数表記を渉猟する必要がある。

² (Türkoğlu 2023) の掲載された *Kardeş Kalemler* 誌 145 号はイスハキー生誕 145 周年記念と銘打って、カザンでの研究の翻訳紹介のほか、数多くの写真が掲載され、イスハキーにかかわる写真・書簡・書付など私文書史料が充分に残存することを伝える。このほか近年 *İdil Ural Araştırmaları Dergisi* 誌、*Uluslararası İdil - Ural ve Türkistan Araştırmaları Dergisi* 誌など注目値する逐次刊行物が創刊されている。

³ イスハキーの日本国内および後述するように奉天における著述の全体像がまだ十分に解明されていないが、この著作集には残念ながら滞日期の著述は不完全である。加えてこの著作集の第 1 巻と第 2 巻のみが東京大学と北海道大学に所蔵されるだけで、筆者はイスタンブールで第 5 巻、第 7 巻から第 10 巻、第 12 巻から第 15 巻までの 8 冊を本助成金で購入することができた。残る 5 冊につき継続して日本への将来を目指したい。

え、戦後の学界からも忘れられた存在であったが、(三沢・大澤 2012) と (Misawa 2012) により、著作の網羅的探索のうえで再評価がなされた。

3. 史資料

上述のような研究の進展は、徹底的な史資料の探索・分析によるところが大きい。近代日本とイスラーム世界との関係の史資料の問題は、(三沢 2024) において詳説しているが、在日タタール人に特化した問題点を整理する。

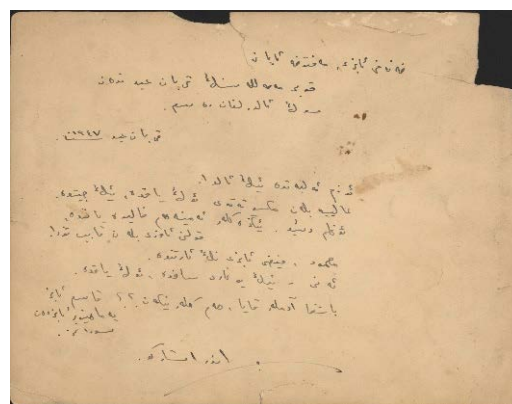
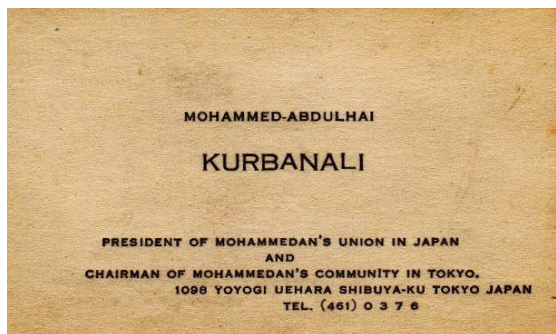
日本側に残っている公的史資料は、2001 年に WEB 上に国立公文書館アジア歴史資料センターが開設され、年々拡充されている状況が史資料探索を飛躍的に活性化させた。望むらくは準公的史資料として位置付けられる早稲田大学中央図書館に寄託される旧大日本回教協会資料も同様にスキャン電子化、データベース化されることが期待される。同資料は長らく忘却されていたが、(店田 2002, 2003) に経緯説明されるように店田廣文によってまずエクセルベースのデータベースが作成され、ついで臼杵陽の科研費プロジェクトにより写真資料のみスキャン DVD 化 (日本学術振興会...2008) され、(Okai 2024) に述べられるようにイスラーム研究機構によりホームページ上にデータベース構築、同機構終了後に早稲田大学図書館 HP に移築されて現在に至る。準公的史料でありながら、デジタルアーカイブとして整備する姿勢は学界にとり福音であるが、(Omoso 2024) ・(Numata 2024) が指摘するように、世界的にデジタルアーカイブの DX 化の進展と国際協力が求められているなか、現在は日本語表記のみの同データベースの多言語化 (理想は英語のみならず、タタール語、ロシア語、中国語などの複数言語) の併記、そのためには ISO (国際標準化機構) の規定するデータベース言語 SQL や国際規格 IIIF (International Image Interoperability Framework) に基づく、修正・再構築を検討・推進することが求められるであろう。さらに国立公文書館アジア歴史資料センターや、関連する機関が所有・保管・電子化している諸史資料との横断検索、クロスレファレンスを可能にするシステム構築が求められる。そこに至れば、在日タタール人の移住移動が日本とイスラーム世界との単純な関係ではなく、グローバル・ヒストリーとして地球規模での広がりがあることが世界的に認識され、さらなる研究の進展が可能になる。その際には写真資料ばかりではなく、いまだ現物資料としてのみ保管される同協会の文書資料についても同様に取り扱いなくてはならない。

公的史資料として、2022 年より国立国会図書館のデジタルコレクションが飛躍的に進化して、フルテキスト・ベースでキーワード検索が可能になったことが福音である。OCR 精度や旧書体漢字などの諸問題は今後解決していかなくてはならない課題であるが、これにより公刊書籍・逐次刊行物の史資料探索が飛躍的に伸びることとなった。一例を述べれば、筆者も従事した大久保幸次の著作に関して時間を

かけて網羅的に調査したつもりがこの変革でさらなる落ち穂的著作が見出すことが出来た。

いまひとつ特記しなくてはならないのは、(沼田 2009) に詳しいように島根県立大学メディアセンター内の服部四郎ウラル・アルタイ文庫に保管される、後述のようにイスハキーが中心となって、奉天において刊行されたタタール語新聞『*Milli Bayrak*』紙の存在である。同紙は言語学研究の服部四郎の個人的購読紙が寄贈されたものであるが、世界的にも稀有に同紙のまとまったコレクションであり、(Usmanova 2007) と (“Constructing Database...2008) はその研究事例である。タタール語公刊資料として日本が貴重な所蔵を有する稀有な例である。

一方、在日タタール人にかんして私的史資料、すなわち私文書としての書簡、日記、覚書、写真（裏書情報も含む）などの重要性が極めて高い。なぜなら公的史資料は日本側の視点・価値観に基づくものがほとんどであり、在日タタール人が日本に対してどのように考え行動していたのかを知る上において、関係者の聞き取り、しかし経年により関係者の多くが既にお亡くなられていたり、朝鮮戦争後に再移住して国外に居住している現在、(沼田 2019) のような聞き取り調査可能な事例は極めて限定的であり、彼らにかかわる私的史資料が貴重である。



私文書史料の例 左上：イブラヒムによる自分の私製葉書によるトルコ宛葉書（裏面省略）

左下：クルバンガリー名刺、右：モスク前での集合写真と裏書 （出典：筆者個人蔵）

加えて公刊されずに関係者のみに配布された印刷物も、公的史資料と私的史資料の中間に位置するものであるが、その多くが研究機関・図書館に所蔵されずに個人蔵になることが殆どで、例えば (The Kobe Muslim Mosque 1935) (The Nagoya Muslim Mosque 1937) は単にモスク建立の経緯ばかりでなく、関係者の実名を知る上で貴重な史料であり、また (Misawa 2021a, 2021b) 同様に存在が忘却されていた史資料の印影版として研究に寄与するものである。

もちろん (沼田 2013) や (三沢 2014, 2018) に指摘されるように、私的史資料には常に個人情報の保護が関わってくることを忘れてはならない。ここではそれに抵触しない画像を付した。

4. 在日タタール人イスラーム教徒共同体

1920 年代初頭にはじまって、1930 年代にかけて日本占領下の満洲から、あるいは満洲から同じく日本占領下の朝鮮半島を経由して当時の共通法により「内地」と規定された日本の本土（本国）に集団で移住し始めたことが知られている。

大久保は「避難民の群れが大正 10 年頃から日本の諸都市にぼつりぼつりその姿を現すと…」と記しているが、タタール人イスラーム教徒が日本本土へ移住し始める大きな契機になったのは、満洲において満鉄と関わっていたクルバンガリーを団長とする回教徒観光団（視察団）の東京訪問であろうと推測されている。

後にクルバンガリーが東京・渋谷の東京回教学校内に設けた東京回教印刷所によって印刷されたアラビア文字表記のタタール語と日本語とが併記された各種の宣伝用絵葉書（市販品ではなく関係者に配布・利用されたもの）のなかにその際に大隈重信（1838-1922）邸の訪問時に撮影された興味深い写真がある。前列において大隈の右隣に坐するクルバンガリー以外は人物同定が出来ていないが、いずれも満洲在住のタタール人であろう。内閣総理大臣まで務めた大隈であったが、1921 年当時は政府の職務からは離れて早稲田大学総長（翌 1922 年まで）が主たる身分である。この絵葉書に記される「回教徒観光団」につき、その経緯を含めた詳細につき、国内の国立公文書館アジア歴史資料センターに属する国立公文書館・外務省外交史料館・防衛省防衛研究所などに資料を見出すことが出来ない。同様に大隈重信の年譜を含めた様々な史資料・研究のなかにも現在のところ関連する記述を見いだせずにいる。

大隈が 1919 年から 1922 年まで帝国鉄道協会（現・日本交通協会）会長の職掌にあった。同協会が日本の内地・外地の鉄道事業政策の要として満鉄ともかわりがあり、その前任者が寺内正毅（1852-1919）元陸軍元帥大将ということも考え合わせるならば、確たる証拠は見いだせないが、満洲において満鉄に関わっていたクルバンガリー以下のタタール人が日本の状況視察に派遣され、大隈邸に招かれ、宣伝用の写真が撮られたのではないかと考えられる。顧みるならば、大隈はかつてア

ブデュルレシト・イブラムの日本訪問時にも面会しており、さらにイブラヒムの息子ミュニル・イブラヒムをはじめとする 3 名のタタール人留学生を早稲田大学に受け入れており、本人の意識はともかくもタタール人との間に接点を見出すことが出来る。⁴



タタール人の移住先として最も多いのが首都・東京であるが、次いで規模が大きい地区として、兵庫県神戸市、愛知県名古屋市などが注目される。両地において在日タタール人共同体が大きかったゆえに後にモスクが建立された。しかしながら史資料的には東京に比して多く残されておらず、神戸については（福田 2008, 2011, 2020）、名古屋については（吉田 2013, 2014, 2023）の尽力により、詳細が解明されつつある。しかし黒龍会はじめアジア主義活動家団体との接点などが想起される九州についてはほとんど事情が不明である。

4. 対日活動の変遷

以上のような前提の整理に基づき、本稿の主題である近代日本における在日タタール人イスラーム教徒の対日活動について、空間と時間（時期）の観点を踏まえて整理する必要がある。

空間的には外地と内地に大きく 2 分され、外地にかんしては満洲が最も重要な地域であり、これに連なって朝鮮半島や満洲以南の中国におけるタタール人共同体のネットワーク全体を考える必要がある。ネットワークの存在は全体としての共通性を形成するが、各地の独自性も留保される。内地においては最もタタール人

⁴ 3 名の留学生のうち、ハサン・フェフミー（Hsana Fehmi）につき、（Türkoğlu 2015）が詳細な研究を著したが、将来的にイブラヒムの息子でもあるアフメト・ミュニル（Ahmet Münir）についての同等の研究が必要である。しかし同氏の娘であるネスリハン・アクソイ（Neslihan AKSOY）女史から 2023 年に筆者が自談の聞き取ったところ、家族には関係する私文書がほとんど残されていないとのことであった。

人口が集中する東京がその中心であるが、東京に次ぐ神戸や名古屋のタタール人共同体は外地と同じく共通性と独自性が併存するネットワークを形成していた。

時間（時期）的には、1920 年代初頭から 1945 年までを次のような 3 つの時期に区分して整理することが有効であると考ええる。すなわち第 1 期として 1920 年代初頭から 1933 年 10 月までの、クルバンガリーが在日タタール人共同体の唯一の中心であった時期。第 2 期が 1933 年 10 月から 1938 年 6 月までの、イスハキ一の訪日からクルバンガリーの満洲への追放までの時期。第 3 期が 1938 年 6 月から 1945 年 8 月の日本の敗戦に至るまでの時期である。

①第 1 期（1920 年代初頭～1933 年 10 月）

第 1 期は前述した 1921 年のクルバンガリーらの「回教徒観光団」を契機に始まったと目される。在満タタール人共同体内部において影響力を有していたと目されるクルバンガリーらに先導されて、組織的に満洲各地から日本内地（東京、神戸、名古屋、福岡など）に大規模な移住が行われた。移住に際して満鉄や満鉄に關係するアジア主義活動家たちや軍部がどのように関わったかを示す史資料は現在のところ見いだされてはいない。

とはいえ第 1 期は日本側の「回教政策」の思惑とクルバンガリーの希望、つまりは双方の利害が噛み合った時期と認められる。その内実はともかくも表面的な友好關係が維持されていた時期である。クルバンガリーは 1925 年に東京回教団を設立しその団長に収まると、在日タタール人共同体を中心に在日イスラーム教徒組織を核にその存在を誇示した。この過程でクルバンガリーは「回教政策」に沿う形での執筆活動を行い、プロパガンダに協力した。その見返りだったのだろうか、在日タタール人にとり極めて重要な子弟教育のための回教学校（Tokyo'da mekteb-i İslamiye）を、はじめ 1927 年に新宿区大久保に設けることに成功した。そののち学校は 1931 年初頭に渋谷区富ヶ谷に移転、1938 年に渋谷区大原に建設されたモスク隣に移転した。回教学校が設けられた翌 1928 年にトルコではアラビア文字表記の印刷物が禁じられ、これを機にトルコからアラビア文字の印刷機械一式を買い入れて、校内に東京回教印刷所（Tokyo'da matba-i İslamiye）を設けて、学校の教材であるアラビア文字表記のタタール語教科書のほか、日本初のアラビア文字表記のコーラン、各種絵葉書（Dündar 2018a : 245-290）、また逐次刊行物『Yapon Mohbiri (Japon Mohbiri)』（『Yani Yapon Mohbiri (Yeni Japon Mohbiri)』に後に誌名変遷）を印刷した（Dündar & Misawa 2010）。⁵

⁵ アラビア文字表記のオスマン語のためにアルファベット転写に揺らぎが見られる。ときにアラビア語風に転写されて *Yaki Yapun mukhbiri : al-mukhbir Yabani* と表記する事例も見られる。完揃いで所蔵する既刊は確認されておらず、誌名変遷・終刊号が判然としないが、恐らく 1931 年の 1 号から 4/5 合併号までの 4 冊を刊行のち、1932 年に巻号を引き継がずに再び 1 号から刊行され、60 号の刊行までは確認できている。

しかしこの時期の最後 1933 年に事態が一変した。それは 1933 年 8 月のアブデュルレシト・イブラヒムの再来日を契機とする。新生トルコ共和国において、オスマン帝国期と異なりイスラーム主義的活動を制約されていたイブラヒムは、駐イスタンブル日本大使館付陸軍武官の神田正種（1890-1983）少佐の仲介を受けて、1933 年 8 月にイスタンブルを発ち 10 月に東京に着、1944 年 8 月という日本の敗戦のほぼ 1 年前に没するまで 10 年以上東京に在住した。かつて大原武慶（1865-1933）や中野常太郎（天心, 1866-1928）らが「亜細亜義会」を設立してイブラヒムを日本のアジア主義推進に利用したのと全く同じ構図で、陸軍軍部や頭山満（1855-1944）・若林半（18xx-19xx）ら日本のアジア主義活動家たちが在日タタール人共同体を活用した「回教政策」の強化策として再びイブラヒムを利用しようとしたのであった。

②第 2 期（1933 年 10 月～1938 年 6 月）

イブラヒムの再来日は日本側の意図と異なる結果を招いた。イスラーム世界においては著名人であったイブラヒムであったが、本人はトルコ革命を経て以前のようなイスラーム主義活動に旺盛なる運動を展開していた頃とは全く異なっていた。再来日後に日本において目立った自己の活動を行うことなく、淡々と日本側の要請にもとづいて象徴的な存在として東京に居住していた。

しかしイブラヒムの来日はヨーロッパの「イディル・ウラル・タタール民族運動」を大いに刺激した。イスラームという宗教に基づくタタール人共同体の結束ではなく、イディルすなわちヴォルガ（Volga）川流域出身のトルコ系タタール人の民族的な大同団結を目指す、この運動は、ヨーロッパやイスラーム世界に各地に拠点を構えて広域なネットワークを形成して展開していた。この運動の主要な活動家であるイスハキーがイブラヒムの再来日と時をほぼ同じくして、それまでの彼の活動拠点であるドイツ・ベルリンを発って上海を経由して、1933 年 10 月に日本にやってきた。イスハキーの訪日によって、在日タタール人共同体は激動の時期を迎えることとなった。

戦前期に日本側が在日タタール人をはじめとする日本在住イスラーム教徒の動向をどのように把握していたかを示す文書史料として有名な外交校史料館所蔵の戦前期外務省作成史料『本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件／回教関係』に所収される、警視總監の藤沼庄平名義で内務大臣の山本達雄、外務大臣の広田弘毅ほか朝鮮総督府、上海、哈爾濱にまで通達されたイスハキーの動向を知らせる文書には、イスハキーが訪日直後に、自身が主幹を務めるベルリンのイディル・ウラル・トルコ・タタール運動の機関誌『*Yana Milli Yul*』誌所収されたイブラヒムを糾弾し、イブラヒムがソ連と連動していると誹謗中傷の英文印刷物を「...報知新聞社其ノ

他關係方面ニ配布..」したとある。⁶そのうえで、イスハキーは内地・外地の双方において、民族意識によってタタール人共同体を束ねるべく、東京・神戸・名古屋・京城（ソウル）・奉天・ハルピン（哈爾濱）などにイディル・ウラル・トルコ・タタール文化協会の支部を設立することを主目的としていた。

しかし、滞日期間中にイスハキーが激しく対立したのは、イブラヒムではなく、よく知られるように、クルバンガリーであった。前述のようにイスハキーは氣ブラヒムを糾弾していたが、日本国内で旺盛に活動をしていたのは、実はイブラヒムではなくクルバンガリーであったからである。粗略であるが、両者の対立の基軸は「民族運動」対「宗教活動」と要約することが出来る。

この時期の最終段階、それまで日本側と歩調を揃えてきたクルバンガリーであったが、1933年に一層の回教政策の強化のために、クルバンガリーとイスハキーの対立を解消して大同団結しようという方針を甘受することが出来なかった。この回教政策の強化の背景には、松長が「1936年の...対ソ関係の変化」（松長 2006: 34）と西野が「1937年7月以来の日中全面戦争への突入という状況と、そこでの対回教徒施策への急迫」（西野 2006:96）があった。クルバンガリーは（加えてイスハキーも）こうした日本の置かれた状況が自身に及ぶ影響を見誤った。日本側は両者の小競り合いにだけ頓着することなく、現今における回教政策の強化のために様々な情報を収集・分析して「回教及猶太問題委員会」さらに「回教問題委員会」を開催して、その具体的な方策を協議し、ここにおいて第1期において日本と蜜月関係にあったクルバンガリーを追放することが確定された。⁷5月5日にスパイ容疑で逮捕されたクルバンガリーは、その1週間後、12日に開催されたモスクの落成披露の献堂式に参加できないままに、6月14日に東京を発ち、下関から船で満洲に渡り、奉天を経て大連に落ち着いた。大連・奉天を拠点に満鉄調査部の活動に協力したものの、その行動は関東軍憲兵隊・警察当局の監視下に置かれた（松長 2009:50）。しかし在満タタール人はイスハキーと同じく民族運動を支持していたために、孤立していた（西山 2006: 101）。

一方でクルバンガリーと対立していたイスハキーの活動も同時に日本側からの締め付けが厳しくされた。最終的に翌1939年8月にイスハキーは内地での活動を切り上げ、クルバンガリーと同じく満洲へ渡り、奉天に拠点を構えた。両者が再び相対したことがあったかどうかを示す史資料は見いだされていない。

⁶ 「本邦ニ於ケル宗教及布教關係雜件／回教關係 第一卷 分割 1-3」JACAR Ref. B04012533200、外務省外交史料館、p. 189。同、pp. 192-3には配布した印刷物の日本語訳「魯鈍か犯罪か」が付せている。掲載誌未確認のため原文が英文か不明。同誌は英文誌ではないのでイスハキーが日本配布用に訳したか新たに執筆した可能性が高い。日本側で配布された文書原文は残存が確認されず、また報知新聞など同時期の新聞にこの内容が掲載された記事は見当たらない。なお「魯鈍」にはロシアを意味する要素はないが、戦前・戦中期に汎用されたロシア・ソ連側のスパイを意味する「魯（露）探」に語感をかけ合わせたものと目される。

⁷ 松長 2009, 34-51。

③第3期（1938年6月～1945年8月）

第3期の幕開けは、6月12日に举行された東京回教堂の献堂式（落成披露式典）であった。この式典はクルバンガリーにかわって、日本側により東京回教団の団長に据えられていたイブラヒムが主催する形式でもって举行された。式典を経て、6月24日に東京回教団は解散となり、かわって「東京イスラム教団」が設立、団長は再びイブラヒムであったものの、顧問に頭山満、海軍の山本英輔（1876-1962）および小笠原長生（1867-1958）などが就任、参謀本部から300円の補助を受けるなど「回教政策」の介入が著しかった（松長 2006：49）。

表面的に見るならば、日本側の方針でクルバンガリーの追放とイスハキーへの締め付け強化により両者を排除し、在日タタール人共同体はイブラヒムを中心に束ねられていくこととなった（松長 2006:39）ように見受けられる。しかしながら、在日タタール人共同体が自主的にイブラヒムを自分たちの指導者として選出したのではなく、日本側が据えたということは実際の在日タタール人たちとの意識・活動と乖離するものであった。実際有名で逸話として知られるように、献堂式において最初のモスク開扉という重要な役割はイブラヒムではなく、イスラーム教徒ではない頭山満によって執り行われ、さらにこれに対する抗議も陳謝もなかったことは、回教政策関係の日本人たちのイスラームに対する無理解・不遜と、イブラヒムが唯々諾々と回教政策に従っていたことを象徴する出来事であった。

献堂式典はイエメン王国の初代君主ヤヒヤー・ムハンマド・ハミードウッディーン（Yahya Muhammad Hamid ed-Din, 1869-48）の第4皇子であるフセイン（al-Hussein bin Yahya, 19XX-1948）を筆頭にイスラーム世界から多くの賓客（同時代の日本では「回教徒来訪使節団」と呼称した）を招いて催された。しかしこの式典には前年の国交樹立に伴い東京に大使館を開設したトルコ共和国は、ムスタファ・ケマル・アタテュルク（Mustafa Kemal ATATÜRK, 1881-1938）の盟友の一人であるヒュスレヴ・ゲレデ（Hüsrev GEREDE, 1884-1962）大使以下いかなる館員も出席させていないことに注目しなくてはならない。多くのイスラーム諸国は冷静に日本の「回教政策」の本質を理解していた。

こうしたなかイブラヒムは「回教徒来訪使節団」を先導して永田町の総理大臣官邸をはじめとする連日のイベントに参画した。早稲田大学に保存される大日本回教協会旧蔵写真にはその際の模様が多数撮影されていたことを伝えるものである。イブラヒムは中心人物のように映るものの、その実は大日本回教協会が主体となってその模様をプロパガンダ写真として大いに活用するためであった。かつてイスタンブルを拠点に様々なイスラーム主義の冊子・雑誌を刊行することに邁進していたイブラヒムは東京において注文をうけたプロパガンダ用の小文以外、自主的に自らの考えを刊行し運動していく姿は見られなかったのである。



1938年5月 イスラーム回教徒来訪使節団の首相官邸訪問（前列向かって右から3番目がイブラヒム）

（出典：早稲田大学図書館 大日本回教協会旧蔵写真資料）

この状況に対して、国外退去処分にはならなかったものの活動を制限されていたイスハキーとその支持者による表立った対立行動は確認されていない。

その後1年ほどしてイスハキーが内地を離れて外地へ、満洲の奉天に拠点を構えると、内地とは異なり、満洲を核にして外地におけるイディル・ウラル・トルコ・タタール協会の存在する各拠点の活動は活発化していた。イスハキーが奉天に入る以前から、既に『*Milli Bayrak*』紙は、日本側、特に関東軍と対立していたことが、『陸支受密大日記』に所収される、北支那方面軍参謀長の山下奉文（1885-1946）の1939年5月8日付の陸軍次官宛電報から理解できる。⁸

陸軍省受領 陸支密受第四七四三号 方軍参二審第二六号

土耳其「タタール」語新聞購読禁止ニ関スル件通牒

昭和十四年五月八日 北支那方面軍参謀長 山下奉文

陸軍次官 山脇正隆殿

奉天民族旗社発行、週刊「ミルリ、バイラツク」紙ノ記事ノ内容ハ東亜新秩序反共統一戦線ノ精神ニ反シ、土耳其「タタール」工作上有害ナルヲ以テ北支方面軍管内一般ニ購読ヲ停止セシメタルニ付キ通牒ス

⁸ 「土耳其「タタール」語新聞購読禁止に関する件」 JACAR Ref.C04120849400、『陸支受密大日記（密）』第25号 昭和14年自5月18日至5月19日（防衛省防衛研究所）

イスハキーが満洲に渡る前後から、在満タタール人共同体にはトルコ共和国の国籍取得運動が大規模に起こっており、満洲からトルコへの移住希望運動が過熱していた。日本側はこの運動がイスハキーならびにイディル・ウラル・トルコ・タタール文化協会の扇動、さらにその背後にイギリス・ソ連が関与していると目していた。1941年2月5日付の関東軍参謀長の木村兵太郎（1888-1948）から発せられた陸軍省の次官・次長宛の秘密電報には以下のように示される。⁹

秘 昭和一六、二、五 電報 二、四、一七、五五発 一九、四〇著
次官 次長 宛

関東軍参謀長

関参二電第一〇六号

哈爾賓特務機関及大連特務機関ヨリノ報告ニ依レバ在満土耳其「多アル」（筆者注：タタール）人ハ大々的ニ土耳其転籍運動ヲ展開シアリテ其ノ背後ニハ英「ソ」ノ策動アルコト確實ナルモノノ如シ 因ニ「ソ」連ハ我ガ方ガ対回教民族積極的工作ヲ実行セバ新疆省及中央亜細亜工作ニ大ナル支障アリトテ「イスハキー」ヲ派遣シ其ノ後モ回教民族ノ対日満離反策ヲ指導セル形跡アリ 又英国モ該問題ヲ重要視シ我ガ方ノ工作進捗程度ヲ諜報機関ヲシテ 偵諜セシメタル事実アリ
通電先 陸、参、総、甲 （終）

木村参謀長はこの直前の1941年1月付に同じく陸軍省の次長・次官に対して、こうしたタタール人のトルコ国籍取得運動への対応策として

「土耳其タタール」ノ土耳其国籍取得希望対策

- 一、彼等ノ土耳其国籍取得希望ニ対シテハ何等表面的妨害工作ヲ作ヲ行ハズ彼等ノ任意ニ委スルノ態度ヲ採ルモ實質的ニ彼等ヲシテ土耳其国籍取得ノ不利ヲ悟ラシムルガ如ク指導ス
- 二、土耳其国籍取得者ハ白系事務局ヨリ除名シ彼等ノ生活必需品取得ニ対スル特殊取扱ヲ停止ス
- 三、土耳其国籍取得者ニ対シテハ防諜上ノ取締ヲ重加シ夫レトナク政治的圧迫ヲ感得セシムル如リ指導ス
- 四、満洲国外ニ退去ヲ希望スル者ハ之ヲ妨害セズ其ノ意志ニ任カス 以上¹⁰

⁹ 『各国ニ於ケル宗教及布教関係雑件／回教関係 第3巻 2. 満洲国』JACAR Ref.B04012551900、(I-2-1-0-2_5_003)（外務省外交史料館）

¹⁰ 「土耳其「タタール」に関する件（電）」JACAR Ref.C01003645300、昭和16年「陸満密大日記 第3冊 1/2」（防衛省防衛研究所）所収の関東軍参謀長初の秘密電報。

状況は満洲にとどまらず中国北部にまで拡大していて、直後の 2 月に甲集団参謀長より

一、北支那ニ於テモ満洲同様「タタール」人ノ「トルコ」国入籍運動展開サレアリ背後関係等目下調査中ナリ因ニ北支那ニ於ケル「タタール」人ハ約百名ニシテ主トシテ天津ニアリ、従来無籍白系ロシア人トシテ取扱ハレアリ宗教的ニハ回教ニ属スルモ支那人回教徒トハ今日迄交渉ヲ持タズ

二、北支ニ於ケル我ガ回教工作ハ其ノ部面ヲ謀略ト文化トモ区分シアリ文化部面ニアリテモ概ネ公開的ニ取扱ヒアリ蘇連ヨリノ作用ヲ直接感ジタルコトナキモイギリスノ作用ナラント判断セラルル¹¹

加えて第 3 期において、日本の対外政策が、北進から南進へと転換したことも在日タタール人共同体の存在に大きな変化を与えた。北進の対象地域たる満洲を含めた中国は西部の新疆とも連なって、タタール人共同体が形成されており、日本内地の在日タタール人共同体もそのネットワークに連なっていた。しかし南進の方針転換により、日本の回教政策はインドネシア・マレーシアを中心とする東南アジアのイスラーム教徒を対象するものへと劇的に変化した（倉沢 2008：233-235）。北進の対象地域と異なり、南進の対象地域にはタタール人共同体は存在せず、宗教は同じでも関係性は希薄であった。

クルバンガリーの満洲への追放のあと、表面的にはイブラヒムが宗教面における代表とされていたとはいえ、実質的に宗教面から東京の在日タタール人共同体をまとめた中心的人物として目されるのが、アフメト・ヴァハップ師（同時代の日本での転写はアフメト・ワハブ、Hoca Ahmet Vahap）であると言われる。

しかしながらクルバンガリーやイスハキーとは異なり、ヴァハップ師につき国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵の文書のなかにその行動にかかわる史資料を管見の限り見いだせずにいる。文書史料は見いだせずにいるが、早稲田大学に寄贈され保管されている大日本回教写真旧蔵資料のなかには同氏の写真を多数見出すことは可能であり、大日本回教協会および東京回教団とのあいだに関係を見出すことができる。写真だけでは判然とはしないが、その個人礼拝の写真は、裏書こそないが協会により何らかの宣伝用に用いられたような写真であり、第 1 期のクルバンガリーのように日本の回教政策に対して良好な関係を取っていたように見受けられる。前述のように 1944 年 8 月にイブラヒムが没した際の葬儀につき写真のみが記録映画のスチール写真として協会に寄贈されているが、葬儀にあたってのヴァハップ師の役割を確認することはできない。

¹¹ 「「タタール」人の「トルコ」国入籍運動に関する件電」JACAR Ref.C04122724100、陸支密大日記 第 5 号 2/4 昭和 16 年（防衛省防衛研究所）



Hoca Ahmet Vahap (出典：早稲田大学図書館 大日本回教協会旧蔵写真資料)

日本の敗戦後において在日タタール人たちの生活は窮したが、1950-53 年の朝鮮戦争に際して前線から日本の医療機関に治療に移送されたトルコの負傷兵の看護にあたった。ヴァハップ師もその中心的な役割を担った一人であるとの指摘がある (Devlet 2016:171)。ヴァハップ師はその後に東京で没し、多磨霊園内のイスラーム教徒墓地区画に埋葬された。

一方でイスハキの満洲への転出のあとをついで、民族主義系の在日タタール人の中心的役割を担ったのは、ケマル・ユースフ (同時代の日本での通り名はイソフカ・カマル, Kemal Yusuf) であると言われる。

彼の息子は、戦後の日本プロレス界を力道山、ジャイアント馬場とともに担ったユセフ・トルコ (本名：ユスフ・オマル Yusuf Omar, 1931-2013) である。著名になった息子は、「...トルコが王制から共和制になった 1922 (大正 11 年) という年、オヤジは政治亡命で生まれ育った故国のトルコをあとに東へ東へと旅を続け、翌年 (1923 年) の春、豊原市に落着いた...」 (トルコ 1982 : 35) と述べる。そのうち、「昭和 13 年の時...豊原からきょうだい 3 人とともに...首府の東京へ向かった」 (トルコ 1982 : 45)。東京の居住先が代々木上原であったので、モスクの落成前

後に近辺に居を移したことになる。¹²先のヴァハップ師と同じく、管見の限り国立公文書館アジア歴史資料センター所収の史資料においてその活動を示すものを見出すことが出来ない。一方でヴァハップ師と同じく、早稲田大学に寄贈され保管されている大日本回教写真旧蔵資料のなかには同氏の写真が多数見出されており、大日本回教協会および東京回教団とのあいだに関係を見出すことができる。さらに1点のみであるが、アジア主義的な雑誌に短文（イソフカ 1939）を寄稿しているが、その内容はイスハキーのような回教政策に反発するものではなく、むしろ回教政策に沿うものである点が興味深い。今後、さらなる史資料の発掘によりケマルの対日行動を検証していく必要がある。



1939年1月22日 於：東京回教堂前（出典：早稲田大学図書館 大日本回教協会旧蔵写真資料）

※右上は部分拡大図

1939年にヨーロッパで第二次世界大戦が始まると、日本社会では在日外国人に対する許容が制限され、とりわけ在日タタール人は「無国籍の旧露避難民」（松長2006：56）として官憲ばかりか社会全体の監視下におかれることになった。この時期にクルバンガリーを後継する集団と、イスハキーの薫陶を受けた集団との間に、少なくとも日本の官憲側の掌握する限りにおいて、以前のような目立つ対立行動は確認できない。ヴァハップ師とケマルとが顕著な行動を控え、第2期のような主導権争いをしていないの原因は、こうした日本社会全体の変化が大きく作用していたこともあるのであろう。

¹² 本人が樺太および東京への移住後に名乗っていたイソフカ・カマル（Isofka Kamal）という名前からトルコ革命に際してではなくロシア在住のタタール人がロシア革命に際してではないかと推測される。

第3期における最大の変化は1941年12月に日本がアメリカとの間に戦端を開いて第二次世界大戦に突入したことである。開戦前からABCD包囲陣など、在日タタール人共同体は大きな制約を受けた、戦時中に内地の在日トルコ人は大使館員を含め軽井沢へ強制疎開されたことが福田義昭による文学作品研究によって知られる（福田2020：61-73）。一方、東京ではイブラヒムをはじめ在日タタール人児童たちがモスクや回教学校で過ごす姿は、プロパガンダとして時折に新聞やグラフ誌に掲載されていたが、実際の暮らしぶり、日本に対する思い・活動までは不明である。戦争の激化に伴い、日本の公的史資料に在日タタール人にかかわる情報は激減してしまう。日本の敗戦に至るまで戦時中の内地・外地の在日タタール人共同体の実態も今後に解明されなくてはならない。



「東京回教学校」『写真週報』（内閣情報部）6号，1938年3月

5. 研究課題

以上のように、先行研究と史資料につき整理をしながら、1920年代初頭から1945年の日本の敗戦に至るまでの在日タタール人の活動を3つの時期区分を設定して俯瞰してきた。

この4半世紀の間に、日本を含め国際的な関心の高まりにより研究は大いに進展し、在日タタール人への移住に至る過程、日本における対日活動、さらには戦後における日本からの再移住は、タタール人や日本だけの問題に限定されずに近代世界の全体にかかわるグローバルな研究課題であることが鮮明になった。

この状況下、未だ不明な部分が多い研究未開拓領域、例えば、外地と呼ばれた満洲や朝鮮半島におけるタタール人共同体の実態、この地で「回教工作」と称された日本の回教政策における位置づけ、外地と内地の間におけるタタール人共同体ネットワークの機能、東京以外の神戸や名古屋など内地の在日タタール人共同体の連携と交錯、さらにとりわけ大きな問題としてクルバンガリーとイスハキーが内地を離れたあとの戦争前夜および戦時下の後継者たちの活動と在日タタール人共同体の状況を、史資料の発掘によって解明していくことが今後の大きな課題である。

【参考文献】

- Abdürreşid İbrahim 1328-1331[1910-1913]. *Alem-i İslam*, 2 vols, İstanbul : Ahmed Sâki Bey Matbaası.
- AKBAY, Okan Haluk (haz.) 2012. *Türk – Japon İlişkilerinin Dönüm Noktasında Abdürreşit İbrahim*, Konya Japon Kültür Merkezi.
- “Constructing Database for Relations between Japan and Islam” Project, supported by JSPS No.17201050 & Media Center, University of Shimane (eds.) 2008, *DVD Photography Collection of Milli Bayrak (Mukden, 1935-1945) Ver.1*, Tokyo : Constructing Database for Relations between Japan and Islam” Project, supported by JSPS No.17201050.
- ÇAĞTAY, Tahir [et.al] (haz.) 1979. *Muhammed Ayaz İshaki: hayatı ve faaliyetleri : 100. doğum yılı dolayısıyla*, Ankara:[s.n.]
- DEVLET, Nadir 1996. “Türkiye'ye katıkında buklunan Tatar-Başkurtlar”, *T.C.Devletinin Kuruluş ve Gelişmesine Hizmet Geçen Türk Dünyası Sempozyumu Bildirileri*, Kayseri Erciyes Üniversitesi, pp.161-173
- DÜNDAR, Merthan 2003, *Uzak Doğu'da İdil-Ural Türklerinin yayın faaliyetleri ve Tokyo Mahalle-i İslamiye Matbaası*, *Türkoloji Dergisi*,16-2
- 2008. *Japonya'da Türk izleri*, Vadi Yayınları.
 - 2011. “A Bashkir leader as meditator between Turkey and Japan: Molla Mohammed Gabdulhay Kurbangali and his letter to Mustafa Kemal Atatürk”, in *Proceedings of the Fourth International Symposium on Islamic Civilization in the Volga-Ural Region*, IRCICA, 45-49.
 - 2014. “An essay on the immigration of the Turk-Tatars to Japan”, 『東洋大学アジア文化研究所研究年報』 48, 233-242.
 - 2015. “İdil-Ural Türk-tatarlarının Japonya'daki yayın Faaliyetleri; Yapon Muhabiri Dergisi”, in *İdil-Ural Tarihi Sempozyumu Bildiriler*, v.1, 213-219.
 - 2016. “Uak Doğu Türk-Tatalarının dini ve maarif faaliyetleri hakkında bir belge”, *Türk Dünyası Araştırmaları Dergisi*, 1-1, 1-21.
 - 2018a. “Tokyo Mahalle-i İslamiye Matbaasında Basılan Propaganda Kartpostalları”, in *Kartpostal Kitabı* (Emine Gürsoy NASKALİ ed.), Kitabevi, 245-290.
 - 2018b. “Articles Published about Korean Turco-Tatars in the Magazine Yanga Yapon Muhbiri”, *Acta Via Serica*, 3-2, 181-196.
 - (ed.) 2018c. *Abdürreşit İbrahim ve zamanı*, Türk Tarih Kurumu.
 - (ed.) 2020. *Japonya seyyahı Abdürreşid İbrahim'in izinde*, Doğu

Kütüphanesi.

- 2022. *Süyümbike'nin Gözyaşları: İdil-Ural Türklerinin Doğu Asya'ya Göçü. Fotoğraflarla Bir Göç Hikayesi*, Ankara Üniversitesi.

DÜNDAR, Merthan & Nobuo MISAWA (eds.) 2010. *Books in Tatar-Turkish printed by Tokyo'da Matbaa-i islamiye (1930-38) (DVD ed. Ver.1)*, Toyo University Asian Cultures Research Institute

İSHAKİ, Ayaz ; KODOMAN, Bayram(haz.) 2014. *İdil-Ural devleti (1917-1918)*, Türk Tarih Kurumu.

KANALZADE, Ahmet 2019, *Sosyalizmden Türkçülüğe Kazanlı Ayaz İshaki*, Ankara : Ötüken.

KUROMİYA, Hiroaki ; PEPLONSKI, Andrzej 2012, “Between East and West: Gaiz Ishhaki and Gabdulkhai Kurbangaliev”, *Nowy Prometeusz*, 3, 89-105.

The Kobe Muslim Mosque(ed.) 1935. *The Kobe Muslim Mosque*, The Kobe Muslim Mosque

MISAWA, Nobuo 2012. *Tatar exiles and Japan : Kôji ÔKUBO as the meditator*, Toyo University.

- (ed.) 2021a. *Bulletin (Kobe İdil-Ural Türk-Tatar Cemaati)* , Toyo University.

- (ed.) 2021b. *Tokyo Muslim School Album (1927-1937)* , Toyo University.

The Nagoya Muslim Mosque 1937. *The Nagoya Muslim Mosque*, The Nagoya Muslim Mosque.

NUMATA, Sayoko 2024. “The Effects of Photographic Materials for Interpreting Tatar Migrants' Narratives”, in *The Archive of the Source Materials about the Greater Japan Muslim League* (Nobuo MISAWA ed.), Toyo University, (in press).

OKAI, Hirofumi 2024, “The Photographic Database of the Greater Japan Muslim League”, in *The Archive of the Source Materials about the Greater Japan Muslim League* (Nobuo MISAWA ed.), Toyo University, (in press).

OMOSO, Chisaco 2024. “The Importance of the ‘Deposited Materials by the Greater Japan Muslim League’ as a Complementary Historical Source in the Analysis of Historical Sources” in *The Archive of the Source Materials about the Greater Japan Muslim League* (Nobuo MISAWA ed.), Toyo University, (in press).

TANSEL, Fevziye Abdullah 1982. “Bibliyografya: Muhammed Ayaz İshakî, hayâtı ve faâliyeti”, *Belletn*, 46-181,155-165.

TÜRKOĞLU, İsmail 1995a. “Abdürreşid İbrahim'in bilinmeyen yılları”,

- Toplumsal Tarih* 19, 13-17.
- 2015b. “20.Yüzyılda bir Türk Seyyahı Abdürreşid İbrahim”, *Toplumsal Tarih*, 20, 6-11.
 - 1997. *Sibiryalı Meşhur Seyyah Abdürreşid İbrahim*, Türkiye Diyanet Vakfı Yayınları.
 - 2015. “Japonya'da Üniversite tahsili gören Tatar : Hasan Fehmi”, in *Volga-Ural Bölgesinde İslam Medeniyet*, IRCICA, 110-133.
 - 2022. “Ayaz İshaki'ye mektuplar”, *Kardeş Kalemler*, 199, 15-30.
- USMANOVA, Larisa 2007. *The Turk-Tatar diaspora in Northeast Asia : transformation of consciousness: a historical and sociological account between 1898 and the 1950s*, Tokyo : Rakudasha.
- [Anonim] 1955. *Millî mücahit ve millî edip Ayaz İshakî*, Osmanbey Matbaası.
- アブデュルレシト・イブラヒム（小松香織・小松久男：共訳）1991『ジャポニヤ』第三書館.
- 2013.『ジャポニヤ：イブラヒムの明治日本探訪記』岩波書店。
（→1991年の改定・増補版）
- イソフカ・カマル 1939「支那事変と回教徒の立場」『東大陸』17-9, 88-90.
- 鴨沢巖 1982-83「在日タタール人についての記録(1)-(2)」『法政大学文学部紀要』28, 27-56; 29, 223-302.
- 倉沢愛子 2008.「「大東亜」戦争期の対イスラーム政策」『日中戦争とイスラーム』（坂本勉：編著）慶應義塾出版会, 233-293.
- クレシサラ好美 2020.「名古屋におけるムスリムコミュニティの様相」『人間科学研究』33-1, 27-38
- 小松久男 2008.『イブラヒム,日本への旅』刀水書房.
- 坂本勉 2008.「アブデュルレシト・イブラヒムの再来日と蒙疆政権下のイスラーム政策」『日中戦争とイスラーム』（坂本勉：編著）慶應義塾出版会, 1-81.
- 白岩一彦 2008.「南満洲鉄道株式会社の諜報ネットワークと情報伝達システム」『日中戦争とイスラーム』（坂本勉：編著）慶應義塾出版会, 83-134.
- 杉田英明 1995.『日本人の中東発見』東京大学出版会.
- 店田廣文 2002.「戦中期日本におけるイスラーム研究：早稲田大学図書館所蔵「イスラーム文庫」の概要と研究課題」『人間科学研究』15-1, 85-90.
- 2003.『CD-ROM:早稲田大学図書館所蔵『大日本回教協会寄託資料』目録（暫定版）』早稲田大学人間科学研究科アジア社会論研究室.
 - 2012.「戦中期日本における回教研究機関：『大日本回教協会寄託資料』の検討」『日本中東学会年報』28-2, 85-106.

- ー 2024.「戦中期日本における回教研究機関の遺産と継承:『大日本回教協会寄託資料』の再検討による評価に向けて」『イスラム世界』100 (近刊)
- デュンダル, メルトハン 2008.「東京回教団長クルバンガリーの追放とイスラム政策の展開」『日中戦争とイスラーム』(坂本勉:編著) 慶應義塾出版会, 135-175.
- ー 2012.「私は夢も日本語で見ていた:トルコ・タタール移民の活動」『ディアスポラ論』(塩川伸明, 小松久男, 沼野充義編), 205-228.
- トルコ, ユセフ 1982.『俺は日本人だ!』ジャパン・プロレスリング・ユニオン.
- 西山克典 2006.「クルバンガリー追尋 (1)・(2)」『国際関係・比較文化研究』4-2, 325-350; 5-1, 93-109.
- 日本学術振興会科学研究費基盤研究「日本・イスラーム関係のデータベース構築」・早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室(編) 2008.『CD-ROM 大日本回教協会関係写真史料 ver.1』 日本学術振興会科学研究費基盤研究「日本・イスラーム関係のデータベース構築」・早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室.
- 沼田彩誉子 2013「東京のタタール移民関連写真資料」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』48, 225-230.
- ー 2009.「タタール語週刊新聞『ミッリー・バイラク』と所蔵状況:島根県立大学「服部四郎ウラル・アルタイ文庫」調査報告」『イスラームと日本:史資料と分析』1, 13-15.
- ー 2019.「極東生まれのタタール移民 2 世の移住経験」『日本オーラル・ヒストリー研究』15, 163-188.
- 福田義昭 2008.「神戸モスク建立前史:昭和戦前・戦中期における在神ムスリム・コミュニティの形成」『日本・イスラーム関係のデータベース構築』(白杵陽:編) 日本女子大学, 21-62.
- ー 2011.「神戸モスク建立:昭和戦前期の在神ムスリムによる日本初のモスク建立事業」45, 32-51.
- ー 2020.『昭和文学のなかの在日ムスリム』東洋大学.
- 松長昭 1999.「アヤズ・イスハキーと極東のタタール人コミュニティー」『近代日本とトルコ世界』(坂本勉・池井優:編著) 頸草書房, 219-263.
- ー 2009.『在日タタール人』東洋書店.
- ー 2012.「東京回教団長クルバンガリーの追放とイスラーム政策の展開」『日中戦争とイスラーム』(坂本勉:編著) 慶應義塾出版会, 179-232.
- マフムート・ムヒティ;[訳者不明] 1942.『「トルコ・タタール」について』中亜問題研究所.
- 三沢伸生 2014.「1950 年代における在日タタール人に関する史料:データベース化すべき私文書史料一例」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』48, 219-224.

ー 2018.「アブデュルレシト・イブラヒム関係の新出史料」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』52, 283-290.

ー 2024.「近代日本におけるイスラーム世界関係の史資料をめぐる諸問題」『イスラム世界』100 (近刊)

三沢伸生・大澤広嗣 2012.「在日タタール人と日本の学界との接点：大久保幸次の著作分析」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』46, 27-54.

吉田達矢 2013.「戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相(1)・(2)」『名古屋学院大学論集』言語・文化篇 24-2, 281-291; 人文・自然科学篇 50-1, 15-34.

ー 2014「戦前期における在名古屋タタール人の交流関係に関する一考察」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』48, 160-149.

ー 2023「近代名古屋在留タタール人が生きた「世界」」『史潮』93, 117-126

【謝辞】本稿は「公益法人 JFE21 世紀財団」2021 年度「アジア歴史研究助成」による成果の一部です。本来ならば助成を受けて 2022 年度末に成果を出すべきところ、世界を覆った新型コロナ禍パンデミック状況により、課題研究の推進が困難を極め、財団のご厚意により 1 年間の延長をお認めいただきました。研究成果の一端をここに纏めることができましたこと、関係各位の寛大なるご措置に改めて感謝いたします。ご厚意に報いるべく、今後も研究を続け本稿に続く研究成果をまとめていきたいと存じます。

また本稿作成にあたり、長年の畏友メルトハン・デュンダル氏、神戸の智囊たる福田義昭氏、新進気鋭の沼田彩誉子氏をはじめ多くの研究者仲間より様々な御教授を受けましたこと最後に厚く御礼申し上げます。